



能忍寺たより



Vol.46

行事紹介

○秋季彼岸会(秋のお彼岸)

秋季彼岸会(秋のお彼岸)は、秋分の日を中日とした前後「日間」に行われる日本の伝統的な仏教行事です。「彼岸」とは、迷いのない悟りの境地である極楽浄土を指します。太陽が真東から昇り真西へと沈むこの時期は、此岸(現世)と彼岸が最も通じやすくなると考えられてきました。そのため、西方浄土に思いを馳せ、ご先祖様を供養する習慣が根付いたのです。

お盆がご先祖様を自宅にお迎えする行事であるのに対し、お彼岸はこちらから歩み寄り、感謝を伝える期間とされています。お墓参りをし、墓石を清め、花や線香を供えることは、自分自身の心を整える修行の場でもあります。また、この時期に供える「おはぎ」は、秋に咲く萩の花に見立てたもので、小豆の赤色には魔除けの力があると信じられています。

暑さ寒さも彼岸までと言われるように、季節の変わり目であるこの時期は、自然の恵みに感謝し、命のつながりを再確認する大切な節目です。日々の忙しさをしばし忘れ、静かに手を合わせることで、穏やかな心を取り戻す機会にしたいものです。

今月のことば

○威風堂々(いふうどうどう)

「威風堂々(いふうどうどう)」とは、周囲を圧倒するような威厳に満ち、態度が立派で力強い様子を表す言葉です。

仏教において、仏様や菩薩が一切の迷いを断ち切り、何ものにも動じない確固たる智慧を持つて座す姿は、まさに威風堂々としたものです。それは単に外見が厳しいということではなく、内面から溢れ出る慈悲と自信が、見る者に自然と敬意を抱かせるような、神聖な力強さを指しています。

現代では、大きな建築物や勇壮な音楽、あるいは信念を持つて堂々と歩む人の姿を称える際に使われます。周囲の評価や一時的な流行に惑わされることなく、自分の信じる道を真っ直ぐに進む、揺るぎない魂の在り方を象徴する格調高い四字熟語といえます。

コラム あれもこれも仏教用語

○億劫(おつくう)

「億劫(おつくう)」という言葉は、現在では「面倒くさい」という意味で使われますが、もとは仏教における途方もなく長い時間を指す言葉でした。

仏教では、宇宙が誕生して消滅するまでの驚くほど長い時間を「劫(こう)」と呼びます。それが「億」も重なった「億劫」は、人間には到底想像もつかない永遠に近い時間を意味しました。本来は「億劫のあいだ修行しても悟りを開くのは難しい」といった、気の遠くなるような感覚を表す言葉だったのです。

そこから転じて、あまりに時間がかかりすぎてやる気が出ない、あるいは気が進まないといった状態を指すようになりました。何気ない日常の「面倒」という感情の裏には、宇宙規模の長い時間が隠れていると考ええると、少し不思議な気がしますね。

何事もバランスよく

○中道の考え

仏教の根本的な教えの一つに「中道(ちゅうどう)」という考え方があります。これは、極端な快楽にふけることも、過度な苦行に身を投じることも避け、偏りのない適切な状態を保つことを指します。この教えを理解する上で、お釈迦様が説いた「楽器の弦」の例え話は非常に有名です。

当時、悟りを開くために激しい苦行に励んでいた弟子の一人に、かつて琴の名手であったソーナという若者がいました。彼はいくら修行しても成果が出ないことに焦り、絶望していました。そこでお釈迦様は彼にこう問いかけました。「ソーナよ、琴の弦はきつく締めすぎるとどうなるか」。彼は「切れてしまします」と答えました。では、逆に緩めすぎるとどうなるかと問われると、「今度は良い音が鳴りません」と答えました。

お釈迦様は「修行もそれと同じだ」と諭されました。努力が強すぎれば心に焦りが生じて体力を消耗し、逆に努力が弱すぎれば怠惰に流れてしまいます。心という楽器から美しい音色を奏でるためには、弦を「ちょうどよい加減」に張ることが不可欠なのです。

この「中道」は、単なる妥協や中途半端を意味するものではありません。その時々で、自分にとつての「最適」を冷静に見極め続ける、非常にダイナミックで実践的な智慧です。現代を生きる私たちにとつても、仕事や人間関係、そして自分自身の心と向き合う際に、この「弦の張り具合」を調整する視点は、健やかに生きるための大切な指針となるでしょう。